
L a n u i t

紅玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a n u i t

【Nコード】

N 7 9 4 9 A

【作者名】

紅玉

【あらすじ】

ホラー短編。4つの物語をお送りします。

『あなたを待っています』 1 - 1

いつからだろう？

彼女が、佇むようになったのは…

「おい、また例の女いるぜ」

和喜は、俺の家の前に佇む女を見て言った。

「気持ち悪」

と、俺は身震いした。

「あれ、完全なストーカーじゃん。警察行った方がいいんじゃないの？」

「でも、どうせ取り合ってくれないだろ？」

と、俺は溜め息をつき、窓から離れた。

まだ和喜は、カーテンの間から女を眺めている。

「うわっ！」

和喜が突然、窓から飛びのいた。

「どうした？」

「目が合った。怖え」

何日も…何日も…

同じ繰り返し。

彼女は必ず、そこに居た。

ある日、我慢できなくなった俺は、彼女に声をかけた。

「あんださあ、何でいつもそこに居んの？」

彼女は苛々した俺を知ってか知らずか、俯いたままだった。

艶やかな長い黒髪が、彼女の顔を隠していた。

病氣的な色の白い肌に痩せ細った身体。今にも折れそうな腕には、男ものの傘が握られていた。

「おいっ!!」

俺の声に、女はビクツと身を揺らした。

「……わ、私……」

口を開いた女の声は、掠れていた。

「私、迷惑ですか？」

と、女は顔を上げ、真っ直ぐに俺を見た。

瞳には、涙を浮かべていた。その様に、心が揺れたが、こんな奴に同情してはいけないと、振り切った。

「すんげー迷惑」

冷たく言い放つと、女は小さく何かを言った。

『あなたを待っています』 1 - 2

そして、その場から走り去ってしまった。

それから、彼女は来なくなった。

安心するはずなのに、俺の心は、ざわついていた。

彼女の潤んだ瞳が頭から離れない。

「あいつ…最後何て言っただろう？」

よく聞こえなかった女の言葉。

そういえばあの傘、見覚えがあるような…。

「ん？」

窓を見ると、雨が降り出していた。

ぼんやりと外を眺めていると、一つの記憶が蘇った。

その日も、雨が降っていた。急な雨だった。

俺は傘をさしながら、家へと帰っている途中。

ふと、近くの本屋を見ると、一人の女が困ったように雨宿りをしていた。

『これ、使う？』

俺は、彼女に傘を差し出した。

『え…？』

女は、驚いたように俺の顔を見る。

『困ってんだろ？』

『でも…あなたが…』と、女が躊躇っているので、
『俺の家、あれだから。気にしないで』と、自分の家を指差した。
そして無理矢理、彼女の手を傘を握らせ、その場から去った。

「あの人、あの時の…」

それじゃあ、あの傘は俺の？

「馬鹿じゃん俺」

と、頭を掻きむしった。

あの方は、ただ返しに來ただけなんだ。でも、きつとなかなか言い
出せずにあそこに…。

彼女の言った言葉。

あれはきつと…

「ごめんなさい」

と

「ありがとう」

もう一度、外を見た。彼女が居ないかつて。

そんな都合のいい事なんてあるはずないのに。

でも、彼女に謝りたかった。一言でも。

彼女は居た。奇跡としかいいようがない。俺は、慌てて外に出た。

『あなたを待っています』 1 - 3

雨が降っている事なんか気にせず、飛び出した。

「ごめん！俺、俺っ！！」

俺と同じようにずぶ濡れの彼女がゆつくりと顔をこちらへと向ける。

ピーポー、ピーポー

救急車のサイレンがして、はっとすると、目の前にいるはずの彼女の姿はなかった。

幻だった…。

俺って、やっぱり馬鹿。

彼女の記憶は、おぼろげになった頃だった。

夜、車を運転していた。

何となく、バックミラーを見た。

「あれ？」

そこには、一本傘が後部座席に立て掛けてあった。

今日は雨っていう予報もなかったし、入れた覚えはないんだけどなあ。まあ、前に入れて忘れてたんだろ。

しばらく車を走らせていると、道の脇に人影があるのが見えた。

その人影は行き交うテールライトに照らされ、見え隠れしている。ちょうど自分の車が近くを通り過ぎた時、少しだけその人影がはつきりと見えた。

長い黒髪を垂らして、俯いたままの女。

何処かで見た気が…。

ポタ…

もう一度女の姿を見ようとバックミラーを覗いたが、そこにはすでにいなかった。目線を前へ戻そうとすると、さっきの傘が目に入った。

「濡れてる…？」

さっきはわからなかったのだが、傘は水滴を付け、座席をぐっしりと濡らしていた。

ポタ……ポタ……

背筋に冷たい風が通り抜け、鳥肌が立った。

ポタ……ポタ…ポタ

何でだ？何で傘は？

鼓動が早くなる。

佇む女の姿が脳裏に焼き付いていた。脳の中でその姿が再生され、2年前の雨の中の女と重なる。

『あなたを待っています』 1 - 4

女は、ゆっくりと顔をこっちへと向ける。

ポタ…ポタ…

少しずつ俺の方へと。

ポタ…ポタ…

少しずつ。

バン!!

女の顔が見えそうになった時、突然映像はそこで途絶えた。
何故なら、車の屋根に何かが降って来たからだ。

反射的に、天井を見る。

何かが動いていた。

そして、青白い片手がフロントガラスにぬっと伸びて来た。もう片
方の手も伸びる。

長い黒髪が垂れ、前の視界を遮る。

女と目が合った。

「うっわあああ」

急ブレーキをかけた。

ガッシャーン

タイヤがころころと転がった。

ガードレールにぶつかった車はボンネットがぐしゃりと潰れ、フロントガラスにはいくすじものヒビが入っていた。テールライトがぼんやりと、カーブに続く白いガードレールを照らし出していた。

俺は…

生きていた。

ドアを開け、静かに外へ出る。

「俺、死んでたな」

おだぶつになった車を見て出た一言。

ポタ…ポタ…

水の滴る音が聞こえた。
後ろを振り向いた。

ポタ…ポタ…

そこには、ずぶ濡れの長い黒髪の女。

「失敗したわ」

ポタ…ポタ…

「え？」

「あと少しだったのに」

ポタ…ポタ…

「あと少しで私と逝けたのに」

女は、ゆっくりと顔を上げた。

「待ってるわ」

口元に、不気味な笑みを零した。

「おい！大丈夫か！？」

車を止めた一人の男が、駆け寄って来た。

男の方に顔を向けた。

「あ…ああ」

「ケガは？」

男にいろいろと質問されたが、記憶にない。ただ、女の姿はその場から消えていた。

いや、消えてはいない。女が存在は。

女の居た場所だけが濡れていた。

今日は、雨なんて降っていない…。

「待ってるわ」

終

『カラス』 1 - 1

カラスはね。

もうすぐ死ぬ人がわかるんだよ。

死ぬ人の家の上を飛び回っている時がそうなんだ。

あなたは知ってる？

よく晴れた空に黒い点が見えた。それは、近づいて来て、誰かの家の上を旋回していた。

カラスだ。

昔聞いた、カラスは死ぬ人がわかるっていう迷信を思い出した。

あの家、死人出るのかなあ？

こんなに晴れやかな一日に、カラスは似合わないと思議と思う。晴れだって、曇りだって飛んでるのにね。

翌日、確かめにあの家へ行ってみた。

大きな花輪が出ていた。

迷信って意外と当たるもんだね。

それから何だか面白くなって、カラスを追い掛けた。

普段は、ゴミを漁ったり、街路樹や電線の上で休んだり。気ままで楽しそうだなって思ったり。

あ…あの家を旋回している。あそこに死人が出るね。

やっぱり確かめに行った。次の日すぐってわけじゃなかったけど、死人は出た。

何でカラスはわかるんだろう？

不思議は止められない。

時間さえあれば、カラスを追い掛けた。

そんなある日だった。

いつものように家を旋回しているカラスを見ると、カラスはこっちへやって来た。そして、頭の上をぐるりと一回りして、飛び去って行った。

何だったんだろう？

死人を確かめに行った翌日、声をかけられた。

それはガラガラの低い声。喉を震わせて喋っているような声だった。

「おい、お前」

辺りをキョロキョロと見回した。人影らしい人影はない。

「ここだよ。ここ」

見当たらない。

「カァーッ」

カラスが一鳴きした。そのカラスは、家の屋根にちょこんととまっていた。

小さな黒い目玉が、じっと見つめていた。カラスと目が合うと、そいつは大きな翼を広げ、重たい羽音と一緒に飛んで来た。

「うわっ！」

『カラス』 1 - 2

目の前まで飛んで来て、視界を遮った。

「おい、おい！」

腕で顔を庇っていたのだが、またあの声が聞こえてきた。
恐る恐る腕を解く。

そこには、真つ黒な人間がいた。
墨を全身に塗ったよう。

坊主頭。

真つ黒な目玉はギョロリとしていて、ギラギラと光っている。
服も黒一色なのだが、裾から出た腕は、鱗状に羽毛が生えていた。
人間ではないのは確かだ。

「だ、誰？」

なのに出てきたのはそんな言葉。

「オレ？死の使者さ」

口端を持ち上げ、不自然に笑うそいつの口の中も真つ黒で、歯並び
の悪い歯が合わさる。

「何の用？」

「お前、オレらを見てただろ」

そう言って笑った奴の笑い声は特徴的で、喉を押し潰したようだった。

「興味を持ったのさ」

また不自然な笑い。

奴は真似だと言って、所構わず着いて来た。

後から気付いたのだが、奴は他の人には見えなかった。

夜眠る時、ベットの隅に奴は腰を下す。何も明かりのない中、奴は
暗闇とうまく溶け合っていた。

なのに、そこにいるという存在感はあった。

いつでも奴の存在は纏わり付いた。

ガクン

あれ？

今、膝が落ち、視界がぶれた。
目を擦る。

疲れているのかなあ？

それから何度も同じような事があった。日に日に足取りが重くなり、
視界は霞んだ。

「そろそろだな」

いつだか、目の前は真っ暗になった。

『オレ？死の使者さ』

ああ、死ぬ運命だったのかな？

でも、それは違った。

今、青い空を見ている。晴れやかな空。
自分には、この空は似合わない。

だって…

死の臭いは歓迎されないでしょ？

「似合ってるぜ」

そう言つて、あの不自然な笑みを零す自分が通り過ぎた。

今日も知らせよう。

死の日和を -

終

『紅い酒』 1 - 1

私は、道に迷った。

ここは、森の中。

キノコを採りに来たはいいけど、まさか迷うなんて。

「ひっ！！」

今、オオカミの遠吠えが聞こえた。

ど、ど、どうしよう。私、食べられちゃう。

足がガクガク震えて、可笑しくもないのに笑いが出て、涙が流れた。可笑しいのは、私の頭か。なんて、冷静に考えてたり。とにかく私は、混乱していた。

「おい」

そこへ声をかけられたものだから、心臓が止まりそうになった。

カチンコチンになった体の首を回すと、後ろには大きな男が立っていた。

何を切るんだかわからない大きな出刃包丁を持って。しかも、雰囲気

にぴったりとそれには、赤黒い血がべったり。

「いっ！！」

私は叫びながら、さらに森の奥深くへと入ってしまった。

「ははっ、元気な奴だな」

男がそう言つて、舌なめずりしてたみたいだけど。

「あーっ、もう死ぬ。もうダメ。これ以上、走れない」

私は、ぜーぜー息を切らしていた。

何処よここ。

汗だくになつて、額の汗を袖で拭う。

「ひいっ！！」

何、雷鳴なんかとどろいてんのよ！雰囲気ばっちりじゃない！！

恨めしそうに、雷が光る方向を睨みつけてやった。

強がってみせるものの、目からはまた涙が溢れてきていた。
もう、ヤダこんな処。

「ん？んん？！」

ふと顔を見上げた時、向こう側に大きな屋敷が見えた。

さっきの事もあって、”大きな”っていうワードがあまりいい連想をさせないんだけど、ここに居るよかましでしょ。

私は、大股でずんずか屋敷を目指した。

『紅い酒』 1 - 2

「すみませーん!!」

できる限りの力を振り絞って叫んだ。

返事はなく、辺りは不気味なくらいしーんと静まりかえっていた。

「入っちゃおっと」

こんな時、ずうずうしい自分の性格が助けてくれる。

中に入ると、変な臭いが鼻をついた。

「臭っ」

ホコリ臭さと生ごみが合わさったような臭い。

サイアク。

だけど、今はそんな事気にしたってしょうがない。

赤い絨毯をずんずか進む。

臭いになんとか慣れてきた頃、思ったより広いんだなあって辺りを見回していた。

ゴーン、ゴーン

「うひゃあっ!!」

静寂だった中に、突然鳴るものだからビックリしちゃったわよ!

側には、私の身長よりある振り子時計が、6時を告げていた。

もう、夕食の時間だ。お腹空いたなあ。

お腹を摩っていると、自分の持っている力ゴに気付いた。その中には、キノコ。生のままってのは気が引けるけど、この際仕方ない。

「いただきます」

「待て!」

口を大きく開けて、キノコをほうり込もうとした時、邪魔が入った。何よって睨むと、そこにはさっき森の中で会った男。

「いひゃあっ!!」

「お前、面白過ぎ」

叫ばずにはいられないって。…ん？面白いつてどづいつ意味よ。

「それ、毒キノコだぞ」

「だから？」

毒キノコが何？今から私は食べようと…

「死にたいんなら別に構わないけど」

何で死ぬのよ。だってこれは……毒……キノコ？

「いひゃああっ！！」

私は慌てて、毒キノコを投げ捨てた。

「やつぱし面白いな」

男は顔に似合わず、ニカアって笑った。

顔に似合わず？この表現は訂正ね。だって、暗がりでも顔がよく見え
ないんだもの。

「何しにここに？」

「キツ、キノコ採りに来たら、道に迷って。それで…」
変に緊張していた。

「で、ここまで来て、勝手に上がり込んだワケか」
こくこくと頷く。

男は無言で、私の目の前にやって来た。
な、何？何なの？

またこれがちょうどよく、雷鳴がとどろいて、ピシッと屋敷の中
が光る。で、ついでによく見えなかった男の顔も映し出される。

鋭い目付きがオオカミみたいで、威圧感をおぼえさせる。でも、鼻
筋は通ってるし、顔は整っていてまあまあ。

そんな事をぼけーっと考えていると、男はぬつと手を伸ばしてきた。
ビクツと体を揺らして、思わず目をつむった。

男は私の頭をぽんぽんと二回軽く叩くと、

「飯食つてくか？」と、尋ねてきた。

な、何、意外に優しいじゃないの。でも…

「子供扱いしないでよ！」

男の手を振り払い、頬を膨らませた。

「いくつなんだよ」

「こう見えて、21！」

「あつははは…お前、21なんだ」

男はム力つく程大ウケしている。

一辺、首絞めたるかゴラァッ！！

「16かそれ以下かと思っただぜ」

処刑決定！！

私が指の関節をボキボキと鳴らしていると、男は思い出したように、
「飯食つてくんなら、作んなきゃな」と言つて、その場から離れた。
「逃げるんかい！待てやつ！！」

男の後を追いつけると、大きな掌が、私の顔面をわしづかみにした。

『紅い酒』 1 - 4

「客は、静かに席で待つてな。これ、礼儀」

男の眼光が光つて、本能的に従わないとやばいつて思った。で…

「しょ、食卓は何処でございましょうか？」と、態度をコロッと変えた。

長生きするためには、自分より強い者には逆らうな。

これ、鉄則よ。

「すぐその3つ目のドアだ」

「はい！お待ちしておりますでございます」

背筋を伸ばして、敬礼した。

「お前、面白過ぎだつて」

何度それ言やぁ気がすむのよ。こっちは随分と真面目なんですけど。男は急に足を止め、くるりと振り返った。

「部屋から出るなよ」

一言告げ、何処かへ行つてしまった。

私は男の後ろ姿を見送った後、男が言つた3目のドアの部屋に入つた。

「うわっ！すごっ！！」

長い長いテーブル。

こんなのあいつ一人でどうすんのよ。宝の持ち腐れてこついうやつ？それとも、金持ちの贅沢つてやつかな？どちらにしろ、淋しい奴には変わりないけどね。

椅子に腰かけて、辺りを見回した。

壁には、鹿やら熊やらの首だけの剥製が飾られている。

私つて、こついう趣味わかんないのよね。こんなもの飾つてどうすんのかしら。

しばらく、テーブルの上に置かれた何本もの燭台のロウソクの炎を

見つめていた。

なかなか男はやって来なかった。

何やってんのよ?! いつまで客人またせる気!?

私は痺れを切らし、男が言った事を忘れ、部屋から出た。そして、男を捜しに行った。

長い長い長い廊下。

この世の果てまであるんじゃないの!?

お腹の空いた私は、憤怒中。

「ん?」

『紅い酒』 1 - 5

今、ドンって音やガリガリって音が。この部屋からね。

そーっとドアを少しだけ空け、中を覗いた。そこには男の姿。

大きな出刃包丁を扱う手元からからピューッと赤黒い液体が噴き出していた。

大仕事みたいで、男が着ているシャツはその液体色に染まっていた。
「？」

何かがコロコロとドアへと転がってきた。

何これ？

私はじつとそれを見つめる。

「ひいひいっ！！？」

私は一目散にその場から逃げ出した。

あれは…

あれは…

人間の首！！

「あいつバケモノだったんだ！」

無我夢中で走るけど、長過ぎる廊下。出口が見つからない。

「あひゃあっ」

コケた。

「いったあ」

足を摩っていると、

「見たんだな。逃がさないぜ」と、いつの間にか男が背後に立っていた。

私は逃げようとしたけど、腰が抜けてて動かなかった。はいつくば

つてでも逃げようとする、服の襟元を掴まれた。

「うえっ」

「まあ、見てなくても帰さなかったけどな。俺はお前が気に入ったんだ」

不気味に笑う男。

こいつからは逃げられない。

私の本能はそう言った。

この屋敷の名は、血糊の館。

逃げ帰った人は一人もいない。

「旨い酒だな」

男はワイングラスに入った、鉄の味がする赤黒い酒を啜って言った。
男の足もとには、恐怖におののき、目玉が落ちそうな程見開かれた生首。

うまく切れなかったらしく、引き千切ったように切れ目からは肉が生々しく露出していた。

そこから血が滴り、赤い絨毯を黒く染めていた。

私はワイングラスに注いだ。

紅い酒を。

終

『だーれだ』 1 - 1

退屈な授業はやっと終わり、いつもの学校からの帰り道。

「ふわあ〜」

自然と出た欠伸。

とぼとぼ歩いていると、ガキ二人が道端で何やらもめていた。

「イヤだって」

一人のガキは、必死に首を振っている。

「平気だよ。行ってみようよ」

もう一人は、そんなガキの腕を引っ張っていた。

「もし、帰れなくなっちゃったらどうするの？」

「大丈夫だって。すぐ逃げればいいだろ」

何かくだらない悪戯でもやらかすのか？

ぐいぐいと腕を引っ張り引っ張り張つられながら、ガキ達は何処かへ行ってしまった。

興味のない俺は、そのまま家へ帰宅した。

「なあ、なあ、いい話あんだけど」

友達の和喜が、机に突っ伏している俺の前へ顔を出して来た。

「うるせえ」と言う俺の反抗はお構いなし。

「肝試し行かねえ？」

そう言いながら、和喜は前の席の椅子に座った。

「行かねえ」

「沙織ちゃん誘ってるんだぜ」と、和喜の顔はにやにやしていた。

沙織ちゃんは、俺がひそかに気になってる、そんな女の子。ただそれだけ。

「勝手に行けばあ」

別に好きまではいつてないし。

「お前も参加者ん中に入ってるから」

俺の選択権は鼻っからなしかよ。だったら聞くな。

「13日の9時、三途公園前集合な」

「三途公園…そこに行くのか？」

俺は勢いよく顔を上げた。

「何その反応。行きたかったの？」

「アホ」

あの場所は…

「みんな揃ったね!!」

和喜は元気がいい。

沙織ちゃんとその友達もいて、俺含めて計4人。

『だーれだ』 1 - 2

「ここって、結構穴場の心靈スポットだよ」と、沙織ちゃんと言った。あまり怖がっている様子はない。

「そうそう、隣町にこんなスポットがあってラッキーだよなあ。なっ、夏紀！」と和喜は言って、俺の肩を叩いた。

浮かれてんのはお前だけだっ。

「そういえば一週間前、この辺りで男の子が二人、行方不明になったよね」

沙織ちゃんの友達は少し怖がっているみたいで、顔が強張っていた。「あ、それ知ってる。最後に目撃されたのって、この公園近辺なんだよね」

沙織ちゃんもどうやらその話は知ってるみたいだな。

「あれでしょ？」と和喜は言って、懐中電灯で近くの電柱を照らした。

そこには、貼り紙があった。行方不明の男の子の二人の写真。まさか…これ…。

俺は、懐中電灯で照らしながら、電柱に近づいた。

「おい、どうしたんだよ」

和喜が後ろにやって来た。

「こいつらさ、一週間前に見たんだよ」

「え!？」

俺の言葉に、和喜は素直に驚いていた。

「こんな偶然ってあるんだな」

和喜はそう言ったが、本当に偶然なんてあるんだろうか？

「とりあえず、中入ろうぜ」

和喜の掛け声で、俺達は中へと足を踏み入れた。

心なしか、足取りが重い。

頭もズキズキと痛む。

行っではいけないと頭ん中では、警報鳴らしてんのに、体は正反對に前へ進む。

「夜の公園って気味が悪いね」

「じゃなかったら、肝試しになんないでしょ」

相変わらず暢気な奴。お前と代わりたいたいよ。

不意に、茂みががさがさと揺れた。

『だーれだ』 1 - 3

「キヤツ」と、沙織ちゃんとその友達は跳びはねる。

「うわっ」

ついでに和喜も。

俺は、そこに近づいた。明かりを照らすと、茂みから一羽のカラスが飛び出して来た。

俺は、呆れたように和喜の顔を見た。

飛び去ったカラスを見ながら、

「なーんだ、カラスじゃん」と、引き攣った顔で和喜は笑った。

沙織ちゃん達もホッと息を漏らした。

「あれ？夏紀くん、その子」

沙織ちゃんが俺の後ろを指差した。

後ろを振り向くと、そこには一人の女の子がいた。

心臓がバクバクいつている。

冷や汗もどつと出て来た。

短めの髪に、赤いワンピーススカート。

あの頃のあの時のままだ。

「迷子かな？」

「お家は何処？」

何も知らない沙織ちゃん達は、女の子に声をかける。

「夏紀……？」

和喜は俺の異変に気付いた。

俺はそんな和喜に、目で訴える事しかできない。

和喜は直ぐさま女の子から俺を離そうと、身動きの出来ない俺の腕を掴んだ。

だけど、俺は動けなかった。

俺のズボンを女の子が掴んだから。

女の子は顔を上げ、俺を見る。

「だーれだ」

女の子が尋ねた。

覚えてるよ。

忘れられなかった。

本当は、見つけたかった。

でも、怖かった。

だって…もうこの世にはいないってわかったから。

口をゆっくりと開く。唇は震え、喉はひどく乾いていた。それでも、声を搾り出した。

「美…代…ちゃん」

声は掠れ、唇同様、震えていた。美代ちゃんは、ニコツと笑った。

『だーれだ』 1 - 4

俺はしゃがみ込み、美代ちゃんを抱きしめた。

「みーつけた」と、俺は呟いた。

「おい！夏紀！！」

和喜は青ざめた顔で、俺を呼ぶ。

地面からは、何本もの白い手が出てきて、俺を引きずり込もうとしていた。

「俺…美代ちゃん、独りにさせちゃったから…」

…ごめん。もう、独りにさせたくないから。

「何か知らないけど、ダメだって！！」

和喜は、俺の腕を掴んで引っ張る。

「うつわあ」

手は、邪魔する和喜も引きずり込もうした。

「夏紀くん！和喜くん！」

沙織ちゃんが和喜が掴んでいる反対の腕を掴んできた。

何で？何でこんな事するんだ？

「もうっ！！」

膝が笑っているくせに、沙織ちゃんの友達も俺を引っ張った。

「ヤダよ…離してよ」

子供みたいに、反抗した。

「ダメだって！俺、お前いなくなんの嫌だぞ！！」

「私だって！！」

「わ、私も！！」

何言っちゃってんの？そんな事言ったらさあ…。

「なっちゃん、泣いてるの？」

今まで黙ってた美代ちゃんが口を開いた。

「美代ちゃん…ごめん…ごめん…」

俺は、肩を震わせていた。

「なっちゃんは、泣き虫だね」

美代ちゃんは、俺の頭を撫でた。

「名前…当てられたから」

実は、この心霊スポットというのは、女の子が現れて、「だーれだ」と名前を尋ねると言ったもの。

答えられなければ、あの世に連れてかれてしまう。

俺は、答えられた。だから、美代ちゃんは俺を連れていかなかった。いや、そうじゃないのかも…

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7949a/>

L a n u i t

2010年12月10日14時47分発行